日本語の条件節と主文のモーダリティ*

井上和子

神田外語大学言語科学研究センター

日本語の条件表現の研究は歴史が長く、多くの研究成果が生まれた。特に 1980 年代以降話者の発話に対する認識のモーダルと発話・伝達のモーダルの研究が進んだ。その成果としての個々の条件節の意味記述を統一的に扱うために、本研究では、条件節の時制辞のモーダル的機能と条件接続要素の統語的、意味的特質に焦点を当て、意味分析及び主文の発話・伝達のモーダリティの選択にこれらがどのように関与するかを中心に論じる。

1．はじめに

1978 年度に文部省の科学研究費補助金を得て、日本語の接続表現について広範な実態調査を行った。その中で条件接続要素として、「と」「たら」「えば」（以後略して「ば」とする）「なら」を取り上げ、それらを区別するための弁別素性を立てた。それらの中で本研究の基礎になるものを 2 節であげる。

日本語研究の中で条件表現の研究は歴史が長く、多くの研究成果が発

*本稿は神田外語大学ＣＬＳ主催のワークショップ「主文現象と統語理論」（2006 年 2 月 11 日－12 日）における口頭発表のハンドアウトに加筆したものである。参加者の方々のご意見をも参考にして、本稿は改訂を予定している。

表されてきたが、特に1980年代以降話者の認識に関するモーダリティと発話・伝達のモーダリティの研究が進み、それまでの研究で残された問題の多くの解明に向かって前進した。同時に、認知論の枠組みでの多様な試みと較べて、言語の形式と意味の様々な側面からの研究はこの分野ではあまり進展しなかった。そこで、テンス、アスペクト、動詞の種類などが表わす一種のムードを検討することにより、発話・伝達のモーダリティを中心にした研究において、個々の条件節の含意とされてきた意味の問題に統一的な基準から切りこんで行けるのではないかという考えに至った。この考えの具体化の第一歩として、本研究では、条件節の時制辞のモーダル的機能（ムードと呼ぶ）および条件接続要素の統語上、意味上の特質が意味分析のみならずその機能が主文の発話・伝達のモーダリティの選択にどのように関与するかという点を中心に論じる。

2.「と」「たら」「ば」「なら」を区別するための弁別素性

本節では、Inoue (1978) で仮定した弁別素性のうちの主要なものを上げる。同時に、この分析において、特に注目した点を問題点として併記する。

2.1. [+Conditional (Con)] (条件)

4 つの条件接続要素が共通にもつ素性で、これらを他の接続要素と区別する。

2.2. [Sequential] (Seq)（継起的）

[+Sequential (Seq)]: 条件節（S1）の表わす出来事が終わった後に続いて主文（S2）の出来事が起こるという時間的な順接を表わし、「と」と「たら」を「ば」および「なら」と区別する。

(1) a. 今朝起きて外を見ると、雪が降っていた。
b. 今朝起きて外を見たら、雪が降っていた。
c. *今朝起きて外を見れば、雪が降っていた。
d. *今朝おきて外を見るなら、雪が降っていた。

[+Seq]はS1における行為、あるいは出来事の実現が、S2の表わす行為、出来事の必要条件であるという意味を持つと仮定する。(Inoue 1978)
(問題点1)

2.2.1. 同一動作主主語に対する制限：[+Seq] の素性を持つ条件節の S2 が過去の一回限りの行為を表わす場合には、S1 と S2 に同一動作主主語を持つ文の許容度が（特に一人称では）落ち、非文法文になる。

(2) a. *私は東京へ行くと、姉に電話しました。
b. *私は東京へ行ったら、姉に電話しました。
c. *去年加藤さんは郷里へ帰ると、墓参りをした。
d. *去年加藤さんは郷里へ帰ったら、墓参りをした。

それに対して、異なる動作主主語をもつ（3）の例文は、適格文である。

(3) a. 昨日宿題をしていると、お父さんが帰ってきました。
b. 昨日宿題をしていたら、お父さんが帰ってきました。
c. 子供たちが公園に着くと、鳩が一斉に飛び立ちました。
d. 子供たちが公園に着いたら、鳩が一斉に飛び立ちました。（異主語）

2.2.2. 同一動作主主語に対する制限の解除：

A.「すぐ」など「引き続いて」の意味を持つ要素を持つ「と」の場合。

(4) a. 私は東京へ行くとすぐ、姉に電話しました。
b. *私は東京へ行ったらすぐ、姉に電話しました[1]。 **（問題点2）**

文の内容が時間的な隣接を表わしていれば、「すぐ」などの要素がなくても、特に同一動作主主語が三人称の場合には、許容される。

(5) a. 加藤さんは、オフィスに着くと、携帯電話で社長に連絡を取った。
b. *加藤さんは、オフィスに着いたら、携帯電話で社長に連絡を取った。

[1] 「すぐ」などを使っても「たら」の許容度は改善されない。この点は3節で、「と1」に[+Time]「たら1」に[−Time]の素性を与えて解決している。

c. ??私はオフィスに着くと、携帯電話で社長に連絡を取った[2]。

d. *私はオフィスに着いたら、携帯電話で社長に連絡を取った。

B. [+Seq]に続くＳ２が習慣を表わす場合

(6) a. 私は東京へ行くと、いつも姉に電話しました。

b. 私は東京へ行ったら、いつも姉に電話しました。

c. 加藤さんは郷里へ帰ると、いつも墓参りをした。

d. 加藤さんは郷里へ帰ったら、いつも墓参りをした。

C. 「と」「たら」「ば」に続く S2 が習慣を表わす場合 **(問題点 3)**

(7) a. 僕はデパートに行くと、いつも玩具を買ってもらいます。

b. 僕はデパートに行ったら、いつも玩具を買ってもらいます。

c. 僕はデパートに行けば、いつも玩具を買ってもらいます。

d. *僕はデパートに行くなら、いつも玩具を買ってもらいます。

2.3. [Hypothetical] ([Hyp]) （仮定上の）

この素性は「と」と他の３つの接続表現を区別する。(8)では「と」のみが許されず、(9) では「と」と「たら」だけが許容される。

(8) a. *課長がいくと、私も行きます。

b. 課長が行ったら、私も行きます。

c. 課長が行けば、私も行きます。

d. 課長が行くのなら、私も行きます。

e. デパートへ行くのなら、パンを買ってきて下さい。

(9) a. そんな物を食べると、おなかが痛くなりますよ.

b. そんな物を食べたら、おなかが痛くなりますよ。

c. *そんな物を食べれば、おなかが痛くなりますよ。

d. *そんな物を食べれるなら、おなかが痛くなりますよ。

---

[2] (5a)と(5c)の対照は、同一動作主主語の制限が一人称で最も強く働き、他の好条件が与えられても解除されないことを示している。

ここで待っていれば、バスが来ますよ。

2.3.1.「ば」について：

A. 「ば」には条件が満たされれば、期待通りの結果が出るという含意がある。((9c) と (9e) の対照がこれを示す。)**(問題点４)**

B. S1 とS2 が同一動作主主語を取っている「ば」条件文においては、(10a)が示すように、S2 は依頼、命令、勧誘など発話・伝達の モーダルを取れない。

(10)a. *デパートへ行けば、パンを買ってきて下さい。

b. 今度の仕事がうまく行けば、いいがなあー。

c. 明日天気になれば、布団を干して下さい。 **(問題点５)**

＊異主語の(10b, c) では、S2 が発話・伝達のモーダルを取ることができる。

2.4. [Speaker's Assertion] (Sp Ass)（話者の断定）

(11) の各文の S1 は聞き手、または一般の認識を想定している。これを[－SP Ass]（話者以外の者の断定）として、[なら 1] を「なら 2」と区別する。**(問題点 6)**

2.4.1. 「なら１」

(11)a. 明日晴れるのなら、ピクニックに行こう。

b. 電話が通じないのなら、私が出向こう。

c. 家で食事をするのなら、電話を下さい。

「なら１」の述部には名詞、形容詞が用いられることがある。

(12)a. 病気なら、欠席してよろしい。

b. 明日課長が出席なら、僕もお供しよう。

c. 先生の話が分からないなら、すぐ質問しなさい。

d. 寒いなら、セーターを着た方がよい。

＊「なら１」の主文(S2)には、発話・伝達のモーダルが現われる。

2.4.2.　「なら２」

「なら２」は(13b)のような定義文に用いられることが多い。

(13)a.　地球の温暖化がとまらないなら、海面の上昇はさけられない。

b.　図形Ａが長方形なら、図形Ａは平行四辺形である。

c. *春が来るのなら、桜が咲く。

d. *春が来るなら、桜が咲く。

「なら１」「なら２」ともに[+Hyp] の素性故に、(13c, d) のように定期的に起こる出来事を表わす文を条件節に取ることは出来ない。

＊「なら２」のＳ2は発話・伝達のモーダルを取ることができない。

まとめ：[Seq] [Hyp] [Sp Ass] が「と」「たら」「ば」「なら」を区別する。

問題点１：[+Seq] の条件文に S1 の内容の実現性に関する含意があるとする仮定。

問題点２：過去時制の[+Seq] の条件文では、条件節と主文に同一の動作主主語の生起が許されない。(同一動作主主語制限)「と」条件節文においては、「すぐ」など「引き続き」の意味を持つ要素が加われば、この制限が解除される。

問題点３：「と」「たら」「ば」条件文において、S2 が習慣を表わす場合に、上記の制限が解除される。

問題点４：「ば」には条件が満たされれば、期待通りの結果になるという含意がある。

問題点５：「ば」条件節が主文と同一の動作主主語を持つ場合、Ｓ2は発話・伝達のモーダルを取れない。

問題点６：「なら１」に一人称以外の者（二、三人称）の断定の意味がある。

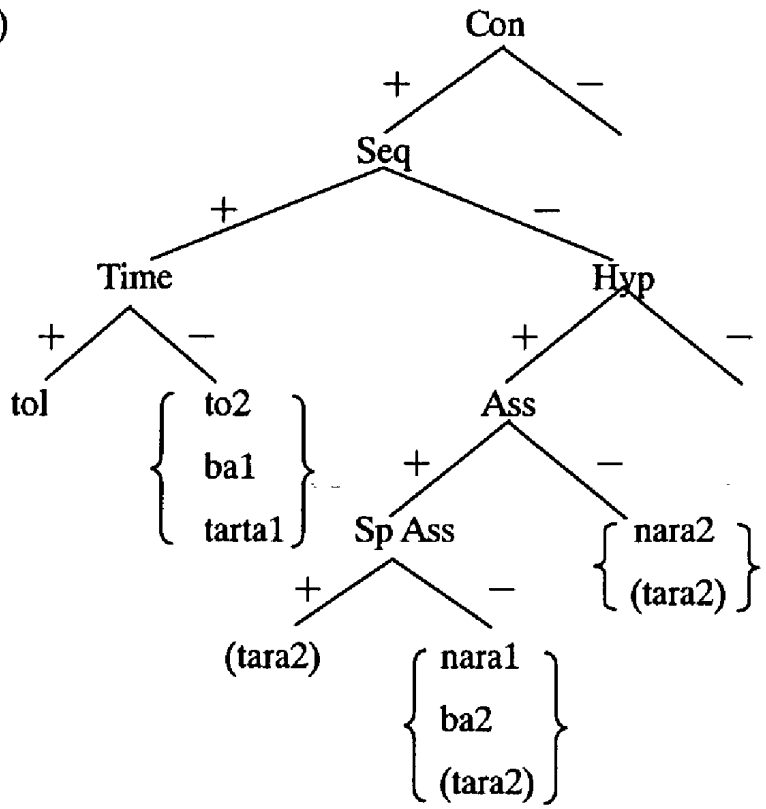
問題点７：一人称あるいは二、三人称の断定、すなわち[±Sp Ass] が S2 のモーダルの選択に深く関与すると仮定する。（本研究において追加する問題点）

3. 統語特性に基づく条件節の意味分析

3.1. 素性の階層的関係

以上の素性に加え、3節での議論を先取りして [Time] [Ass] (Assertion) を新しく提案する。これらの素性を階層的に並べたものが(14) である。

(14)



4節では、殆ど制限が無い「たら」の分布を(14) に当てはめて(14)の妥当性を検証する。((14)ではこれを先取りして「たら2」をカッコに入れて表わす。) 従って、以下の論考では「と」「ば」「なら」を取り上げる。

3.2. モーダリティの階層

(15)

太郎が序文を翻訳し	てい	る	だろう	ね。[3]
1	2	3	4	5
文核	相	時制辞	認知的モーダル	発話・伝達のモーダル

(井上（1976))

4：認知的モーダル－＞ E－モーダル　（断定、推量、伝聞など。）

時制辞：定時制辞(finite tense)は断定(assertion)）のモーダルとして働く。

：時制の分化のない不定時制辞の「る」はその主語の認定を表わす。

5：発話・伝達のモーダル－＞D－モーダル（命令、依頼、疑問、意志など）

3.3 「と」条件節の意味

一般に、「と」は「時間的継起」を表わし、その拡張として「因果関係」の意味を得るとされている。時間的継起から因果関係への移行については、坪本(1986) (1993) (1998)の文連結の普遍的特徴を基にした詳細な研究がある。本論文では、これを基本的に採用する。さらに、「と」条件節の意味として、認知論の立場から、種々の提案がある。本節では、それらの代表的なものを取り上げ、統語的手がかりを用いて統一的な分析を試みる。

3.3.1. 実現性に関する仮定

問題点1：作業仮説：[+Seq]の素性は条件節の表す事態の実現を含意する。「と」に先行する不定時制辞「る」に対する時の解釈は主文の時制に

---

[3] 4：発話に対する話者の発話時における認識・態度を表わすモーダル(epistemic modal)(仁田 1989：言表事態めあてのモーダリティ)

5：発話・伝達のモーダル(deontic modal を含む)（以後前者を E-モーダル、後者を D-モーダルと呼ぶ。）

依存する。時制辞には「確かなものと認める」という基本的な意味があり、定時制辞には「確かなものと認めて伝える」という（寺村の「確言」の）意味があるとする。「と」条件節は、不定時制辞「る」の基本的意味により、事態認定のムードを持ち、実現性の含意をもたらす。また、[事実的用法]の「と」（例えば蓮沼(1993)）と呼ばれるのも、このムードによる。

本論文では、「時間的継起」—>「因果関係」への拡張がさらに「条件設定」に繋がると考えるが、いずれの場合にも「る」のムードにより条件節が表わす事態の認定の意味、すなわち実現性の解釈、が保持されている。

3.3.2. [+Seq] の意味

この素性は、時間的継起 ([±Time])に下位分類される。

3.3.2.1.「と１」: [+Seq][+Time]

Ｓ１の事態の生起に続いて、Ｓ２によって新しい事態を新情報として表出する。（Ｓ２は久野(1973)の「中立叙述」文の一種）主文がＥとＤ のモーダルを伴っていない中立叙実文は、眼前の動的状況を描写して、文全体を新情報として表出する。従って、聞き手(二人称)を動作主主語として取ることはできない。現象文もこの点では中立叙実文である。ただし、現象文は話者が観察者の立場に立って動的状況を描写する。それ故、一人称の動作主主語をも受け入れない。

現象文：＊ＥとＤ のモーダルと共起せず、三人称主語を要する。

久野(1973)の「中立叙実」の記述は「が」格主語文にたいするものである。そこでは、「中立叙述の「ガ」は、述部が動作を表わすか、存在を表わすか、一時的な状態を表わすかの場合に限られる。」と述べている。この述語選択は現象文にそのまま当てはまる。

(16)a. 太郎が見舞いに来てくれた。（動作）
　　b. 雨が降っている。（動作）
　　c. 机の上に本がある。（存在）

d. 空が青いね。　　（一時的状態）（久野(1973) p. 32）

e. 雪で空の便が欠航している[4]。（動作の結果状態）

典型的な「と1」条件節を持つ文を現象文と仮定する。

次に挙げるA－Dはこの仮説を支持する。

A. 「と1」条件文は、E とDのモーダルと共起しない。

B. 一人称主語に対する条件(同一動作主主語に対する制限)に従う。

C. 現象文と同じ述語選択の可能性を持つ。

(17)a. 子供達が戸を開けると、大きな猪が飛び出してきた。　（動作）

b. 玄関を入ると、子犬が寝そべっている。　（動作）

c. 学生達が引出しを抜いてみると、探していた鍵があった。　（存在）

d. トンネルを抜けると、空が真っ青だった。　（一時的状態）

e. 食堂へ行くと、アルバイト学生が食器類を片付けていた。（結果状態）

D. 現象文は時制の分化（「る」形と「た」形の使用）を許す。「と 1」条件文のＳ２にも時制の分化がある。

3.3.2.2. 問題点２

過去の一回限りの行為の場合に、S１、S2 の主語が同一の動作主であってはならないという制限（[+Seq] 条件節にたいする制限）

この制限は動作主が一人称の場合に一番強く働く。それは、現象文の主語が一人称の動作主であってはならないからである。ただし、三人称主語の場合にも、(18)に見られるように、同一動作主主語制限を受ける。

(18)a. *去年加藤さんは郷里へ帰ると、墓参りをした。　(=(2c, d))

b. *去年加藤さんは郷里へ帰ったら、墓参りをした。

S2 の主語が経験者や対象の場合には非現象文になり、この制限が働かない。

---

[4] (16e)は筆者が加えた文である。これによって、動作動詞ならばアスクト、テンスとは関係なく、すべて現象文の述語として用いられることを示す。

(19)a.　気がつくと、私は数人の子供に囲まれていた。

b.　黙って彼の話を聞いていると、私は自分の用件が言い出せなくなった。

3.3.2.3.　**問題点２**

「と 1」節において、時間的継起を強調する要素によって同一動作主主語の制限が解除される。「たら」には解除がない。**（問題点２）**

(20)a.　私は東京へ行くとすぐ、姉に電話しました。　(=(4))

b. *私は東京へ行ったらすぐ、姉に電話しました。

「と」条件文では、文の内容が時間的な隣接を表わしていれば、「すぐ」などの要素がなくても、特に同一動作主主語が三人称の場合には、許容される。

(21)a.　加藤さんは、オフィスに着くと、携帯電話で社長に連絡を取った。(=(5))

b. *加藤さんは、オフィスに着いたら、携帯電話で社長に連絡を取った。

c. ??私はオフィスに着くと、携帯電話で社長に連絡を取った。

d. *私はオフィスに着いたら、携帯電話で社長に連絡を取った。

(21a)と(21c)の対照は、現象文であるＳ２は、一人称主語に対する制限が、文脈の変化によっても解除され難いことを示している。

＊「と１」([+Seq][+Time])：ＥとＤ のモーダルと共起しない。

3.3.2.4.　**問題点３**

[+Seq] 条件文が習慣を表わす場合に、同一動作主主語に対する制限が解除される。

習慣を表わす文は、恒常的状態文であって、現象文ではない。従って現象文にかかる制限とは無縁である。

3.3.2.5.　「発見」[発現]「意外性」

「と」条件節は先行する「る」により、その主語の確認の意味が与えられる。そこで、「と」節の事態を認定した主語が、Ｓ２の現象文が表出する新情報に接するという時間的継起のために発見の意味が生じると考

える。

3.3.3. 「と２」：[+Seq][－Time]

因果関係、条件設定の意味を持つ。

＊Ｅ－モーダルおよび話者の意志、欲求などを表わすＤ－モーダルの一部との共起も可能である。しかし、命令、勧誘など聞き手を巻き込むD-モーダルとは、共起しない。(23c-e)がこれを示している。

(22)a. ここで待っているとバスが来ますよ。

b. その音声を聞き取れないと、単語一つ書き取れません。

(23)a. 朝夕運動すると、体によい。

b. テレビはつけっぱなしにしていると、すぐだめになる。

（坪本 1998（25b））

c. どんなに困ろうと、人には頼るまい。

d. 今晩うるさくすると、明日映画に連れて行かないよ。

e. 寝室がもう少し暖かいと、いいのになあー。

f. アルバイトだと、何時でも辞められるよ。

問題点４：「と２」条件文では、条件をみたせば、それに応じた帰結が得られるという順接関係からくる意味があるが、これが総称的な意味解釈に繋がる（23a, b）。

まとめ

以上「と１」節のＳ2 を現象文と仮定し、その統語上、情報構造上の特色に注目して、この仮定の妥当性を確認した。さらに、一般に「と」条件節の意味として認められている「実現性」「意外性」などの含意も、問題点２と３としてあげた動作主主語に関する制限とその解除も、この仮説によって説明可能であることを見た。さらに、現象文としての「と１」（[+Seq][+Time]）から[+Seq][－Time] への拡張を基にＥとＤのモーダルとの共起可能性を論じた。

この段階までの検討では、認知論からの議論に用いられる「話者の認識」「話者の視点」「話者の発言意図」など多様な一般化は不必要なよう

である。次の課題は、この立場で説明できない現象を洗い出し、その解明に統語的な、あるいは形式上の手がかりがどの程度まで役立つかを見極め、認知論上の一般化をどのように集約できるかを検討することである。

3.4.「ば」条件節の意味

一般に「ば」条件節には「確定未来」（赤塚 1998）、「事実的条件」（蓮沼 1993）などの意味が認められている。

3.4.1. 「確定未来」「事実的条件」

「ば」条件節は、どのような形でも時制辞を許さない。これによって、「ば」節には主語の認定を全く関与させず、条件設定の役割を果たすものがある。これを「ば１」([+Seq][－Time])とする。「ば１」は条件設定の「と２」に近い。そして、設定された条件が満たされれば、それに応じた帰結が得られるという、順接関係の意味が与えられる。（**問題点４**の「期待通り」の意味）その結果、(24b, c) に見られるように、「ば１」条件文も「と２」条件文と同様に総称的記述文になることが多い。「確定未来」「事実的条件」の含意は、「ば１」の条件設定の意味による。

(24)a. ここで待っていれば、タクシーが来ます。
b. 努力すれば、報われる。
c. 勤勉でなければ、成功しない。
d. もう少し我慢すれば、事態が好転するだろう。
e. *スーパーに行けば、パンを買って来てください。

＊「ば１」は、条件設定の「と2」節と同様に、E-モーダルとの共起は許されるが、D-モーダルとは共起しない。(24d, e)

問題点５：「ば」条件文が主文と同一の動作主主語を持つ場合、S2 は D-モーダルを取れない。

この制限は[+Seq]の素性を持つ[と 1][と 2]と共に、「ば１」条件文に課せられるものである。

3.4.2. [Hyp] （仮定）の意味

時間的継起を軸とする[Seq]の素性を持つ条件節の「る」は、その主語の事態認定を表わすのみで、主文に見られる話者の断定ではない。他方、[Hyp] は、条件節の内容の実現性を仮定するという話者あるいは聞き手または第三者の断定に関して選択を許すと仮定する[5]。これを[±Ass] (assertion)とする。次に、[+Ass]の素性をもつ条件接続要素には話者の断定かどうかの別がある。([±Sp Ass] (the speaker's assertion)) この仮定の根拠の一つとして「なら１」をあげる。

3.4.3 「なら１」: [+Hyp][+Ass][－Sp Ass]

「なら１」が話者の断定ではなく、聞き手または第三者（二、三人称）の断定を意味することは、いろいろの形で記述されてきた。**(問題点６)** 本論文では、この解釈が出るのは、「のなら」の基本形「のだ＋なら」に含まれる「のだ」が断定のモーダルとして働き、しかも、「なら」が[+Hyp]（仮定）という素性を持っていて、話者の断定の可能性を排除するので、「話者以外の断定」([－Sp Ass])の意味になると考える。

(25) a. (=(9a)) 明日晴れるのなら、ピクニックに行こう。
　　 b. この部屋を使うのなら、事務に届けて下さい。
(26) a. 睡眠薬を飲んだのなら、早く寝る用意をしなさい。
　　 b. 徹夜で論文を書き上げたのなら、私が郵便局へ出しに行ってあげますよ。

(25)(26) の条件節はいずれも、聞き手または第三者の断定を含意している。

(27) a. 病気なら、欠席してよろしい。
　　 b. 明日課長が出席なら、僕もお供しよう。
　　 c. 先生の話が分からないなら、すぐ質問しなさい。
　　 d. 寒いなら、セーターを着た方がよい。

---

[5] 補文に話者の断定を含意する可能性については、英語の叙実述語の研究で既に論じられている。紙数制限のために、この点については、稿を改めて論じる。

(27a,b) のような名詞＋「なら」は、「病気だ＋なら」「出席だ＋なら」のように、断定の「だ」が省略されたものである。これが先に上げた話者以外の者の断定（[－Sp Ass]）を表わすために、実現性を含意すると考える。**(問題点 6)**

＊「なら１」はこの素性により、その S2 には、判断文、命令文、勧誘文、意志や願望を表わす文など、発話・伝達の Ｄ－モーダルを担う文を取ることができる。

本論文では、条件節が持つ[+Ass]のムードによって S2 にＤ－モーダルが許されると仮定している。(問題点７)この仮定は、[+Ass]を具現する「の」を持つ「なら 1」条件文が Ｄ－モーダルと自由に共起することによって支持を得る。

＊「なら１」条件文はＤ － モーダルを取る。([+Ass])

3.4.4.「ば２」: [+Hyp][+Ass][－Sp Ass]

「ば２」は、「ば１」と同様に、時制辞が関与しない。しかし、「ば２」自体が[+Ass]の素性をもつと仮定する。そして、話者が「断定し、仮定する」という矛盾から、一人称以外の断定（[－Sp. Ass]）、すなわち、(28a) のように二人称の断定、あるいは(28b-f) が表わす一般に想定できる条件であるという断定に移行すると考える。(28) の各文に見られる広範なモーダルとの共起可能性がこの仮説（問題点７）を支持する。

(28)a. 寒ければ、セーターを着なさい。
b. 今度の仕事がうまく行けば、いいがなあー。
c. この実験に失敗すれば、後の可能性はないのだ。
d. 駅へ行くのにどう行けば、よいでしょうか。
e. 明日天気になれば、布団を干して下さい。
f. 週末に雨が降らなければ、ピクニックに行こう。

従って、(29) の各文のＳ１は一人称以外の断定の意味をもちえないので、適確文にならない。「ば１」とすれば、(29a)においてＳ２のＤ－モーダルとの共起が不可能なこと(問題点５)は説明できるが、異主語の(29b)

が説明できない。

(29)a. *スーパーへ行けば、パンを買ってきて下さい。
b. *来年サーカスが来れば、入場券を買ってあげますよ。

＊「ば２」条件文も D － モーダルを取る。([+Ass])

3.4.5. 「なら２」

(30c, d) が示すように、[+Hyp] ゆえに、「なら１」「なら２」ともに現実に必ず起こる事態を表わすことが出来ない。

(30)a. 地球の温暖化が止まらないなら、海面の上昇はさけられない。
b. 図形Ａが長方形なら、図形Ａは平行四辺形である。
c. *春が来るのなら、桜が咲く。
d. *春が来るなら、桜が咲く。

（30）の例文が示すように、S2 は判断文である。しかし、広く発話・伝達のモーダリティを担う D－モーダルの命令文、勧誘文、意志や願望を表わす文などは「なら２」の S2 には現われない。これによって素性[－Ass]（「断定を含まない」）の仮定に根拠が与えられる。これは、[Ass] の素性を持たない「と２」「ば１」に取って代わることができることによっても支持される。

(31)a. ここで待っていると / いれば /?いるなら、バスが来ますよ。
b. 努力すると / すれば / するなら、報われる。
c. 勤勉でないと / なければ / 勤勉でないなら、成功しない。

「なら２」は「と２」「ば１」と同じく、現実的な条件を設定する役割を果たす。これにより、「なら２」の含意として「現実性」があげられることがある。

これらの例文の「なら２」はいずれも、古風な用法と受け取られ、現在は「ば」に取って代わられているとするべきであろう。

＊「なら２」は、D － モーダルとは共起しない。([－Ass])

まとめ

本研究では、[Seq][Time][Hyp][Ass][Sp Ass]の５個の弁別素性を仮定し、これによって問題点２－６までの記述的一般化が統一的に分析でき、条件節の時制辞のムードと条件接続要素に与えられた素性によって、作業仮説の問題点１と７にも根拠を与えることが出来ることを示した。さらに、認知論からの条件節の意味に関する論考の多くを統語論の守備範囲で解決する可能性を開いた。次に、４節において、「たら」条件節の分布により、これらの仮説と記述的一般化を検証する。

4. 「たら」条件節

4.1. 「たら」条件節の分布

以上見たとおり、「と」「ば」「なら」は、互いに重なり合う形の連続体をなして分布している。(32)によってこの連続的分布状態を示す[6]。

(32)

A	B	C	D	E
[+Seq][+Time]	[+Seq][-Time]	[+Hyp][+SpAss]	[+Hyp][-Ass]	[+Hyp][-Sp Ass]
「と1」	「と2」 「ば1」 「たら1」	「たら2」	「なら2」 「たら2」	「なら1」 「ば2」 「たら2」

4.1.1 「と１」と平行的に分布しない「たら１」([+Seq][－Time])

問題点２:

「たら１」条件文では、「すぐ」を入れても許容度が上がらない。

これは、「と」のように時間的継起に密着した意味を持っていないことを示す。

(33) ??私は東京へ行ったらすぐ、姉に電話しました。

(34)a. 加藤さんは東京に行くとすぐ、社長に連絡した。

b. ??加藤さんは東京に行ったらすぐ、社長に連絡しました。

---

[6] 紙数の都合で例文を省略したが、「たら２」はＣＤＥに広く現われる。これは、「たら２」をこれらの素性によって弁別する必要がないことを示している。

(33)(34b) は同程度に許容度が落ちる。これは、「たら１」は「ば１」に近く、[－Time]の素性を持つとする根拠である。同じく[－Time]を持つ「と２」「ば１」と「たら１」は相互に交替可能である。

(35)a. ここで待っていると、タクシーが来ます。　（「と２」）
b. ここで待っていれば、タクシーが来ます。　（「ば１」）
c. ここで待っていたら、タクシーが来ます。　（「たら１」）

4.1.2. 「たら２」：[+Hyp][+Ass][+Sp Ass]

「たら２」においては、時制辞「た」が独立に話者の断定のムードを表わし、実現する事態を仮定するという意味を生じると考える。(36) のようにＳ2 にＤ－モーダルを許すことも[+Ass]の素性の根拠となっている。

(36) スーパーに行ったら、パンを買ってきて下さい。

さらに、「たら２」に与えている話者の断定（[+Sp Ass]）の素性を支持するのは、次のような例である。

(37) a. 予想外の出来事がおこったら / *おると / *おこれば / * おこるなら、君はどうしますか。
b. 加藤君がまた遅刻したら / *すると / *すれば / *するなら、承知しないからね。
c. 円が暴落したら / *すると / *すれば /*するなら、次の方策を考えて下さい。

このように、「たら２」は話者が現実に起る出来事として仮定するという含意を持ち、他の[+Hyp]の条件節が生起できない位置に用いられるのである。

<u>まとめ</u>

(14)で示した条件接続要素の階層構造の仮説は、これらの条件節が互いに重なり合い連続体であることを捉え、かつそれぞれの意味上の特徴を

統一的に扱う可能性を示したものである。最も制限の少ない「たら」の分布状況とその意味内容から、この仮説は実質的な支持を得ることができた。

4. 結語

Inoue (1978) で用いた[Seq][Hyp][Sp Ass] の弁別素性を基に、時制辞のムードを用いて、これまで意味の問題として個別に扱われていた、条件節の意味を統語的特性の観点から統一的に分析することを試みた。さらに条件節に与えられたムードの種類（主語の認定か、話者あるいは話者以外の者の断定か）によって主文におけるモーダルが選択されるという仮説にも、ある程度の根拠が与えられた。この点については、順接条件節のみならず、「ても」などの譲歩節、反実条件節などの分析により検証する必要がある。これは、残された課題である。

参照文献

赤塚紀子 1998.「条件文と Desirability の仮説」中右実（編）2-97.

有田節子 1993.「日本語条件文研究の変遷」益岡隆志(編) 225-278.

林四郎（編） 1986.『応用言語学口座２ 日本語と外国語』

井上和子 1976.『変形文法と日本語』大修館書店

Inoue, Kazuko 1978. "On Conditional Connectives," 井上和子（編）『研究報告「日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究」』19-87. 国際基督教大学

久野暲 1973.『日本文法研究』大修館書店

益岡隆志（編）1993.『日本語の条件表現』くろしお出版

益岡隆志 1993.「日本語の条件表現について」益岡（編）1-20.

益岡隆志 1993.「条件表現と文の概念レベル」益岡（編）23-39.

中右実（編） 1998.『モーダリティと発話行為』研究者出版

鈴木義和 1993.「ナラ条件文の意味」益岡（編） 131-148.

坪本篤郎 1986.「and と「と」：文連結のプロトタイプと範疇化」林四郎（編）

172-197.
坪本篤郎 1993.「時系列と背景化の諸相」益岡　(編)　99-130.
坪本篤郎 1998.「文連結の形と意味と語用論：第1章 文連結のキーワード、第2章 時と条件の文連結」中右(編)　100-133.
仁田義雄 1989.「現代日本語のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編) 1-56.
仁田義雄・益岡隆志（編）1998.『日本語のモダリティ』くろしお出版
蓮沼昭子 1993.「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡(編) 73-97.
森山卓郎 1989.「認識のムードとその周辺」仁田・益岡(編) 57-74.

261-0014
千葉市美浜区若葉 1-4-1
神田外語大学
言語科学研究センター

inoue@kanda.kuis.ac.jp